

「シュテルゼフ峠」での邂逅

板見潤一

先日の「敬老の日」を周囲の皆さんに祝われた方、あるいはまだ自分のことではないと思っておられる諸姉諸兄、いずれもこれをご覧になれる程にお元気ならば、何よりでございます。

さて『永遠の朗読劇場—菊地久治作品集と千葉高生—』の発刊から既に二年経ちましたが、最近思わぬ反響があり、札幌と横浜にお住まいのお二人の方にこの本をお送りする運びとなりました。既に発刊保存責任者の高橋君初め各編集委員が、手分けして各所に寄贈送付して参りましたが、このお二人に関しては全く別個の経路を辿った末に、ある峠の上で出逢うという奇縁でありました。既に同期会元締め伊藤事務局長から簡単な報告がありましたが、以下にその詳細を述べさせて頂きたいと思います（その経過を語る OY 氏のブログを以下に編集引用させていただきます）。

札幌の方を OY さん、横浜の方を TD さんと仰います。共に我々より年輩の男性です。まずお二人が、かの「峠」で邂逅、峠の名は「シュテルゼフ峠」。アルトゥール・シュニッツラーの作品であるこの翻訳劇を、各々中学生の時に上演なさった由。そのお二人の思わぬ出逢い、そこへ私がフラリと逢着、そして「シュテルゼフ峠」の原本『盲目のジェロニモとその兄』の菊地版朗読を記録した、真打ち嶋田君の登場。この「峠」に集った四人の老人たちの奇縁は、まずドイツの作家シュニッツラーですが、何よりも千葉高の国語教師菊地久治師による導きの糸が感じられるのです。

峠とは古来、旅人が振分け荷物を肩に登る旅の途上、来た道を振り返り、行く途を望むそのひと時、暫し荷を置いて風に吹かれる一時の安らぎの場所。諸姉諸兄の風景や如何にと拝察申し上げる次第です。

(付記) 峠と言えば、高校の現代文で読んだ太宰の『富嶽百景』をご記憶でしょうか。深い涙の死の谷間を歩んだ太宰も、あの作品ではデンと鎮座するお富士さんを見晴るかす御坂峠の風に、暫しの癒しを得た筈。電網書肆を立ち上げんとする同期生吉川君が、そんな太宰の掌編を編んだようです（文学アンソロジーの続刊準備中の由）。

また彼によれば、千葉県松戸を舞台とする『野菊の墓』の作者、伊藤佐千夫(政夫)が(民子を残して)進学した中学とは、千葉中(現千葉高)ではなかったか…と推察しています。確かに、「千葉の中学」の寮に寄宿する政夫は帰省のたび、民子が戻された実家の市川に寄ろうかと幾度も逡巡しつつ、ついに恋の終焉を迎えるのでした。

@@

<http://yukimiti.com/60.kako/602.junihi.html#site08> 【YO 氏の左記ブログより若干編集。JI】

3 シュテルゼフ峠

■昭和32年12月1日の文化祭で、三学年の劇は「シュテルゼフ峠（シュニッツラー原作・佐藤加輔脚色）全三幕」でした。出演者が少ないので舞台に出る配役は無言で演技をし、舞台の袖で演技を見ながら声を出す配役に分られました。演技者の演技をしっかりと見ていないとセリフが合わず、セリフを覚えていないと演技ができないという非常に難しい劇でした。

20フランの金貨は、裏側が金色をしている蜂蜜を蓄える一斗缶の蓋で代用しました。出演者の服装は自宅で調達できましたが、憲兵用の警察官の衣装と帽子は担任の先生がどこからか借りてきました。私は演出と憲兵役でしたが、練習が思うように進まず土壇場になって3日間で仕上がった記憶があります。劇のあらすじをご紹介します。（「シュテルゼフ峠」の原作名は「盲目のジェロニモとその兄」です。）

3-1 第一幕 峠のホテルの玄関前

■シュテルゼフ峠はイタリアからオーストリーへ越える国境にあります。峠の手前にホテルがあり、峠を越える馬車の仕度が遅れ客は体をもてあましていました。ホテルへ客が出入するたびに、玄関前の植え込みのそばで盲人のジェロニモはギター



を弾いて歌い、兄のカルローは帽子で喜捨をうけていました。

客とホテルの従業員の会話から、子供の頃にカルローが窓から吹矢を吹いたとき、庭へ飛び出した弟の目に当たったのが原因でジェロニモは両眼を失明しました。兄は一生を弟の目の代わりをすると誓い、献身的に尽くしていることが紹介されます。

退屈でイライラしていたフランスからの客がカルローへ1フランを喜捨し、ジェロニモには兄へ20フラン金貨を渡したとからかいました。嘘を信じ込んでしまったジェ

ロニモは兄を疑い、カルローが独り占めしたと思い込んで兄の言うことを信じなくなります。

3-2 第二幕 ホテルの食堂

■ホテルの食堂で御者達の求めで歌い終わったジェロニモは、ドロボウみたいなやつに渡さず自分にお金をくれと言い張り、あまりのことにカルローは食堂から出て行きます。ジェロニモは自分で稼いだお金を自分で使いたいと、何か美味しいものを持ってくるよう頼みましたが紅茶だけにしなさいとたしなめられます。

椅子に腰掛けたまま熟睡している客がいます。御者達は会話に疲れて寢室へ引き取



ると、ジェロニモは一人では何も出来ずにすすり泣きを始めました。紅茶を運んできたホテルの従業員が、明日は仲直りをするよう言い聞かせながらジェロニモを寢室へ連れて行きます。

カルローが夢遊病者のように入ってきました。戻ってきたホテルの従業員に昼間のようすを打ち明けると、退屈でイライラしていたフランスからの客がジェロニモをからかったと知らされます。従業員の半年分以上の給料に相当する20フランという額は、カルローにはどうしようもありません。

ホテルの従業員が眠っていた客を揺り起こすと、上着が床に落ちて重そうな音がしました。上着を椅子にかけ、目を覚ました客を支えながら寢室へ連れて行くのを見送ったカルローは、引きつけられるように上着のそばへ歩みよりました。上着のポケットへ手を入れると、でてきたのは20フラン金貨。これさえあれば・・・。

3-3 第三幕 暁の峠

■シュテルゼフ峠の頂上を少し下ったところまで来たカルローは、足が痛い腹がすい

たというジェロニモをあつかいかねて金貨を握らせました。ジェロニモは歓喜し、兄が独り占めしようと隠していたが怖くなって出したんだろうとカルローを責めました。憲兵が峠の下から登ってきます。カルローにお金を盗んだという疑いがかかっているため憲兵隊へつれていくといいます。おどおどしているカルローの様子にジェロニモは、自分のお金ばかりか他人のお金まで盗んだとなじります。そして、憲兵に



盗まれた金額を聞きました。20フランの金貨1枚と聞いて、ジェロニモはすべてを理解したのです。

カルローに自分がそうさせたことを詫びながら、20フランの金貨を取り出して憲兵に自分を逮捕するよう求めます。憲兵は泣きすぎるジェロニモを振り払い、カルローを連れ去りました。

木々の間から朝日が差し込み、遠くから郵便馬車の鈴の音が近づいてきます。シュテルゼフ峠に、何度も何度も兄に詫びるジェロニモの声がこだましました。

3-4 幕外 後日談

■この当時「シュテルゼフ峠」という劇は全国で取り上げられ、文化祭では必ずと言ってよいほど演じられていました。同窓会に参加されたときの担任の先生のお話ですが、



私たちが第一回を演じたあと翌年も取り上げ、中学校を転勤するたびに何度も「シュテルゼフ峠」を演目として取り上げたそうです。なかなか思うように運ばず「観客がすすり泣いたのは、後にも先にもこの時だけだった。お前たちはすごいよ」と、おっしゃいました。

何回目になったのか誰一人記憶していませんが、70歳を超えていまなおこのメンバーの同窓会が続いています。残念なことに10名は先立ってしまいました。

4 シュテルゼフ峠の出会い

4-1 横浜のTDさん

■この日から45年後、インターネットの「シュテルゼフ峠」で見知らぬ二人が出会いました。早朝にインターネットへ接続すると、平成14年6月29日午後2時28分発信のメールが届いていました。

TD: はじめてお便りいたします。横浜のTD（64歳）と申します。貴方様のホームページを拝見し、失礼を省みずお便りいたしました。中学時代の文化祭の「シュテルゼフ峠」につき記述しておられましたが、私も中学三年のときにカルロー役で出たことがあり、大変懐かしく拝見いたしました。

OY: 札幌のOY（60歳）と申します。シュテルゼフ峠のカルロー役を演じられたとは懐かしいですね。おどおどした表情と動きが難しく、表現力を要した役でしたね。わたし達の年代が中学生の頃、先生方が注目されたのがこの劇のようです。同窓会の時に、あちこちの中学校で採用されたと担任の先生より伺いました。

TD: ご返事ありがとうございます。どのようにしてホームページに辿り着いたか不思議に思われるかもしれませんが、実は昔の中学時代の卒業アルバムを見ていて、「シュテルゼフ峠」を調べて見ようと思いつき検索しましたところ行き着いたのです。ご迷惑とは存じましたが、親近感を覚えてメールしてしまいました。

OY: 「シュテルゼフ峠」を Google で検索してみると、劇団たんぽぽが1950年に公演していました。シュニツラー原作、佐藤加輔脚色だったのですね。私も45年前のカルローにあえたような気持ちがしています。お許しいただき、時々お話が

できればと思っています。

T D: 「シュテルゼフ峠」は、シュニッツラーの『盲目のジェロニモとその兄』が原作ですのでこれで検索してみましたところ、千葉県の子葉高校の同期会のホームページに出会いました。ご紹介します。名物先生が授業時間にこの物語を朗読された様子を、A君という方が名文で投稿されており感激いたしました。こんな素晴らしい先生に出会いたいものだと思います。この先生の返信文の写真も掲載されていますが名文です。

O Y: お知らせいただきましたホームページを読みました。涙が溢れました。涙が流れ落ちました。と同時に、受験勉強が遅れるという苦情の電話。P T Aのお歴々の抗議。校長、教頭、教務主任の苦悩。馬耳東風の名物先生。職員室の様子…など目に浮びました。本当に、会ってみたい先生ですね。味のある先生はいなくなりました。個性のある先生も少なくなりました。A君の文章、先生の手紙、そして、感想集などすべてをプリントアウトして職場の仲間に見せました。いつ戻ってくるのか分かりません。

T D: ホームページには菊地先生の読書会の様子が紹介され、サラサーテの「チゴイネルワイゼン」をBGMにシュニッツラー作の『盲目のジェロニモとその兄』や、チャイコフスキーの「花のワルツ」をBGMにトーマス・マン作『トニオ・クレーゲル』を朗読された様子が描かれていました。感化されやすいのか、『トニオ・クレーゲル』(岩波文庫300円)を買ってしまいました。



OY: 買いましたね、やっぱり。実は、近くの小さな本屋さんへ寄りましたが置いていません。翌日、大きな本屋さんへでかけましたが取り寄せと云われました。昨日の午後、北海道庁主催のマンション管理講座へ参加する途中で買えました。

「青春の喜び悩み悲しみを美しく奏でた青春の歌である」。表紙にある解説を読むと、菊地久治先生の言葉が頭に浮びました。「きみたちに教えたのは愛なのです。どこまでも人への愛を忘れずにゆきなさいね」。なぜなの、こんなに夢中にさせるのは。

『トニオ・クレエゲル』を読み終わりました。表紙の「一少女との恋愛にも堪えられぬものだった」に期待して開きますと、その読みにくいこと。二度目は、学生時代に読んだ翻訳の口調が懐かしく、三度目でやっと恋愛じゃなく片思いとわかりました。「金髪のインゲ、インゲボルム・ホルム」。この言葉だけでトニオの胸の高まりが理解できます。片思いの専門家の判断ですから間違いありません。日本人の名前じゃこうはいきませんね。菊地久治先生はどの部分を朗読されたのでしょうか。菊地先生になりきって読み直してみました。

その結果、岩波文庫版78ページの後ろから三行目「トニオ・クレエゲルは、水浴と足早な散歩のあとの…」からだと思いました。80ページの中ほどに「おずおずした甘い喜びをいただきながら…」とありますから、79ページ一行目の「インゲボルム・ホルムは、金髪のインゲは…」という表現が、いかに大きな驚きであったか分ります。

おそらく、ここで菊地先生は絶句されたでしょう。窓の外へ目を移し胸の高まりに身を任せたでしょう。愛とは絶句、息苦しさを伴うことを生徒に伝えようとしたでしょうね。良い作品にめぐり合えました。A君にもお礼を申し上げます。

TD: 私も『トニオ・クレエゲル』読み終わりました。途中一寸中断していましたが、13年振りに故郷に帰る50ページあたりから引き込まれ、一気に読んでしまいました。30年近く訪れていない、幼稚園から学生時代を過ごした富山県の片田舎の風景を重ねて読んでいました。

そしてチャイコフスキーの「くるみ割り人形」のDVDが有るのを思い出し、もう一台のパソコンで「花のワルツ」を再生させながら、菊地先生はどの場面を読んだのか、A君の記述を読み直しました。まさに、さすがです。推理通りだと思いました。久しぶりに良い読書をしました（^^）。

OY: ウィーンフィルハーモニーでカラヤン指揮の「くるみ割り人形」をはじめ、ずいぶん多くのレコードを持っていましたが、いまは一枚もありません。自作パソコン電源部のファンが、起動時にものすごい音をたて始めました。古くなったケースを

取替え、ついでにマザーボードを更新してからDVDもつけようと考えています。クラシックのDVD盤を購入し、「花のワルツ」を聞きながら菊地先生になりきれるのはいつでしょう。

TD：今朝、NHKの中学生日記で、授業評価で先生を生徒が採点するという話題が有りました。こんなことをすると菊地先生のような方は居なくなるのかなと、ふと考えてしまいました。

■カルローの愛、菊地先生の愛、A君の作品に滲む愛。「県立千葉高昭和43年卒業生同期会」のホームページより「菊地久治先生の思い出」へリンクさせていただきました。生徒の心の中に刻み込まれた菊地先生を尋ねてみましょう。また、『トニオ・クレエゲル』を読んで自分自身の体験を重ねてみましょう。

クリックで「[菊地久治先生の思い出](#)」へ移動します。

4-2 仙台のJIさん

■中学卒業から63年後、再びインターネットの「シュテルゼフ峠」で互いに見知らぬ二人が出会いました。横浜のTDさんよりご紹介いただいた菊地久治先生のこと、なんとその菊地先生の教え子とおっしゃるJIさんでした。

JI：仙台に住むJIと申します。千葉高時代の恩師、菊地久治の「朗読劇場」を書物にした際に、編集を担当した者でございます。千葉高から当地の大学に学んだあと、宮城県内で高校の国語教師定年、思わず菊地師の後を継ぎました。

この度、偶然にもWebページで貴ブログの「シュテルゼフ峠」に逢着しました。菊地師の朗読作品の一つであるアルトウール・シュニツラー『盲目のジェロニモとその兄』、何とその演劇化されたものだと分かり、驚いた次第であります。

また更に、同じく中学生の時にその作品を演じられた、横浜のD様とのやり取りの中で我が恩師の「朗読劇場」に話が及ぶ…何という奇跡的目撃演劇的展開!!

早速、キクチ劇場を高一の胸に刻んだ旧友らにWebページを紹介報告させて頂いた次第です。受験教育と魂の教育といったテーマにまで言及して頂いた事、菊地師を偲ぶ我々同期生らには、師の墓前に焼香頂いたようにも思えて感激一入にございます。

もしも差支えなければ上記本を進呈させて頂きたいと思います。思春期に名作との出逢いを演出、一生を貫く感動を与え得た師を持つことが出来た者同士として。

Y様の学年を皮切りに、以後何度も演じられたのに、「観客が啜り泣いたのはお前達の時だけ」と仰った先生にも敬意を表して!!よろしければ横浜のD様にもと思えます。合わせてご住所等をお教え願えれば幸甚に存じます。

OY: メールをありがとうございました。正直に驚きました。菊地久治先生の教え子であるJIさんと「シュテルゼフ峠」で出会えるとは信じられない奇跡でした。JIさんは菊地久治先生の影響を受けられ、教鞭をとられどのような思い出を教え子に刻まれたのでしょうか。

同級生のジェロニモ役もカルロー役もあの世へ旅立ちましたが、シュテルゼフ峠も菊地久治先生も私の心の中に生きています。改めて(千葉高 WEB ページの)「菊地久治先生の思い出」をすべて読み返しました。そして、JIさんがまとめられた「菊地久治先生遺稿集」がどのような内容のものかと大変興味を抱きました。

さらに、JIさんの「同窓の日々」を読ませていただきました。「居眠りにも礼儀がある」とのお言葉に目が留まり、説明会の際に時々実践していたことなので噴き出しました。以下は「同窓の日々」より転載しました。【略】

JIさんには身体ご不調とのこと、お見舞い申し上げます。私も78歳となり、様々な持病を抱えても元気です。菊地久治先生の思い出を教えてくださいました横浜のDさんへJIさんのメールを転送して、メールアドレスをお知らせしてもよろしいか照会中です。

TD: お久しぶりです。今日は久々に30℃と涼しくなりました。札幌はいかがでしょう。コロナは神奈川も東京と並び患者の報告が止まりません。ジムとカラオケも通っていますが、どうにか罹らずにいます。

シュテルゼフ峠の件から菊地先生の話になったのは、18年前の事となりますね。メールをいただいて驚きました。YOさまのHPが凜と存在するお陰ですね。そのご縁にあやかって(本ご送付の件)お言葉に甘えようと思います。

OY: ご紹介しました仙台市のJIさんへ、TDさんの情報を連絡しました。どのような資料が届くのか分かりませんが、18年前の「菊地先生」がよみがえるのが楽しみです。TDさんもお体をご自愛ください。

JI: シュテルゼフ峠の出会いをご縁に、こんな本をお送りすることになりました。半世紀以上前の教室の思い出をもとに、素人集団が作り上げた旧師の本です。

シュニツラーの『盲目のジェロニモとその兄』の376ページあたりからでもお目通し頂ければ幸いです。ちなみにA君こと中高同期生MS君（ただいま群馬県の施設にて車椅子で療養中）の小説的再編ですが、同期生一同すっかり感動の罫にはまりました！

YOさまの有難い反応をメールで紹介したMS君から喜びのメールが参りました。出版責任・在庫管理のYT君からもたくさんの人に読んでいただけるのが嬉しいとのことでした。取り敢えず横浜のTD様にもお送りいたします。

OY： 昨日、『永遠の朗読劇場』（428ページ）が届きました。ありがとうございます。山折哲雄氏命名の「少年探偵団」のご活躍に敬意を表します。さっそく朝から「菊地劇場」にどっぷり浸っています。まさに虎は死して皮を残す、人は死して名を残す。菊地久治先生の授業を受けられた皆様方がうらやましいかぎりです。



OY： 『永遠の朗読劇場』の第IV部と第V部を読み終わりました。皆さん、さすがに菊地久治先生の教え子ですね。読みやすく、在りし日の先生のお姿が浮かび上がってきます。362頁のMSさんの言葉を借りると、醜悪ともいえる八十歳近い私の目にもインゲボルムの姿が浮かびます。

おそらく、皆さんの脳裏にはトニオ・クレーゲルの背景にある、金髪のインゲが強烈に焼き付いたのではないのでしょうか。JIさんご指摘のようにトニオの目を通して、菊地先生は人を愛することの大切さを教えたのです。強烈な印象を多くの人に残した作品に出合えて幸いです。

J I: ご多忙の中、菊地本熟読頂き有難う存じます。本日、館林市の MS 君より電話がありまして、札幌と横浜のお二人、特に OY さんのご感想、詳細をお伝えしたところ、大変喜んでおります。これまでに何冊か小説を自費出版している彼、具体的な直接の反響は今回が初めてかも知れません。

TD: 当方にも J I 様から『永遠の朗読劇場』が届きました。重量感あふれる装幀、探偵団の皆さんの編集、いずれも素晴らしく、菊地先生への最高の贈り物ですね。このような力作を見も知らずの他人に無償で贈呈して頂き感謝するばかりです。

J I: 横浜の TD さんからは私にも、本到着のご丁寧なメール拝受しました。館林市の MS 君からの連絡ですが、彼の最近作にて「回文」の本をお送りした由、本日お手許に届くかとのこと。菊地伝説の創出者 A 君こと MS 君の現在をご覧頂ければ幸いです。

■教育とは、学校で習ったことをすべて忘れた後に、なお残っているものをいう。
(アルバート・アインシュタイン 1879~1955年)

4-3 館林市のMSさん



■ 中学卒業から 6

3年後、横浜の TD さんより

ご紹介いただいた菊地久治先生、その菊地先生の教え子とおっしゃる JI さんの同級生、館林市の MS さんよりスマートレターが届きました。開封すると文庫本で『回文撰歌—どこまで詠めるか 言葉あそび徒然草—』（251ページ）と手紙が入っていました。

MS: 初にお便りいたします。仙台の J I 君より先日来、水魚の交わりのごときメールをいただき当方も感激、失礼なこととは思いますがご笑納いただければ嬉しい限りです。贈呈させてください。本来ならくわしく述べたい思いも、体の都合上かないませんので、乱筆を平にご容赦を。

O Y: MS さん、回文撰歌をありがとうございました。MS さんの作品の中で私が特に好きな歌は「虫たちが幽かに鳴き出すのは初夏真つ盛りのとある晩」に読まれた「翅の滲む蒸す時あるが夏の世のつながる秋と澄む虫の音は（はねのしむむすときあるがなつのよのつながるあきとすむむしのねは）」でした。…【後略】

【付記】JI から OY さんへのメール（札幌のナナカマドと栗の実の写真への返信）

OY さまのブログと千葉高のサイトが 相互交流できたようで嬉しく思います。

これも、シュニッツラーを取り上げて 我々生徒たちに示して下さった各々の先生のお蔭かと思ひますと、学校教育の根幹には、文学的感動を伝え得る良質の教師がいるように思われますね。その教えを受けた我々が、各々の樹にナナカマドや栗の実のように、豊かな実を成らせてゆく様、これこそ本当の教育の成果なのだなあ…と思いました。

@@

以上、札幌で各方面に日々ご活躍の OY さんのブログから、菊地師と千葉高生に関する部分を御了承の上、切り取らせて頂きました。同期生諸氏へご報告するのに、私などが訥々弁ずるより、ずっとリアルな時系列が眼に浮かぶと思ったからです。

旅の途上のことは、その時々消えていくのも一興でしょうが、峠道でフト出逢った人や記憶に束の間、身を任せてみるのも、また旅の興趣ではないでしょうか。

横浜の TD さんから札幌の OY さんへの、また千葉高サイトへの、WEB アクセスが無ければ、峠の茶屋がこんなに賑わうことはなかったはず。「シュテルゼフ峠」の上演を中三の生徒らに提起された先生、そして『盲目のジェロニモとその兄』の朗読を高一の我々に演じてくれた先生、それらの恩師に出逢えたことは私たちにとって幸いでした。更に、放っておけば記憶の彼方に散じた筈の「最高の授業」を記録に留め

てくれた OY さんと、A 君こと MS(嶋田正文)君に、深く感謝したいと思います。(JI)

花・死人に口なし
他七篇
シュニッツラー作
番匠谷英一・山本有三訳




19世紀末ウィーンを体現する愛欲と情熱の作家シュニッツラー(1862-1931)。彼は、愛し、悩み、裏切られ、死んでいく人間たちを憐むことなく描き続け、メランコリックな情調を漂わせて人生の夢さを強く印象づけた。表題作の他に、「わかれ」「盲目のジェロニモとその兄」「ギリシャの踊り子」「情婦殺し」など全9篇を収録。

赤430-6 岩波文庫

作/アルトゥール・シュニッツラー
 訳/山本有三・演者/石丸さち子

盲目のジェロニモとその兄
 ARTHUR SCHNITZLER

弟を失明させた罪の意識に苦しむ兄は、救済する弟に寄り添い続ける。愛と不信に揺れ動く兄弟の微妙な心理→果たして兄弟の心は結びつきの糸か?!



兄 石丸 宛 久
 弟 水石 丸 飛 夢

2016 1/9 13 日

DDO Aoyama Cross Theater



『盲目のジェロニモとその兄』他七篇所収

2016/01/09-13石丸さち子演出 「盲目のジェロニモとその兄/フィンセントとテオ」2016